シリーズ
探訪 わが町文化財
その111

水銀朱（すいぎんしゅ）

先月号で、水銀をつかさどる女神「丹生都比売命（にうつひめのみこと）」と丹生神社について紹介しました。今月号では、丹生神社と関わりの深い水銀朱についてお伝えします。

水銀朱とは、「辰砂（しんしゃ）」という鉱物を粉末にした赤色の顔料であり、既に縄文時代には使用されていました。古代の人々は赤色を神聖な色と考えており、邪悪なものを封じ込め、災いを防ぐ「魔除け」のために使用していました。神社の柱などが赤く塗られているのもその理由からだといわれています。また、弥生時代後期から古墳時代中期（２０００年～１５００年前）には、死者を葬る儀式の中で赤色顔料を盛んに使う風習があり、赤色には蘇生（そせい）や霊を封じ込める力があると信じられていたようです。

古代の赤色顔料には、主に鉄鉱石や粘土の中から採れる酸化鉄を用いたベンガラと水銀朱がありますが、水銀朱はベンガラに比べて赤の発色が鮮やかで、産出量も少ないことから貴重なものでした。水銀朱の原料である辰砂は、近畿から九州にかけての中央構造線（九州から関東に伸びる長大な断層）付近から産出することが知られています。しかし、産出量は限られており、辰砂に含まれる水銀の含有量も低いことから、古代においてはごく一部の権力者のみが使用できる特別なものであったといえます。

町内でも、水銀朱と関わりの深い文化財が旧吉備中学校校庭遺跡（下津野）で発見されています。写真は、粉末にした辰砂をすり潰して水銀朱に仕上げる工程で使用された石臼で、弥生時代後期後半（約１８００年前）のものです。石の中央付近は、鮮やかな朱色をしています。

この石臼が使用された時代は、権力者のお墓が大きくなり、水銀朱の使用も盛んになる時代です。時の権力者の指導によって、各地で辰砂の採掘が行われていたと考えられますが、旧吉備中学校校庭遺跡の石臼は有田川流域でも水銀朱が製造され、各地に運び出されていたことを物語るものであり、町の歴史を考える上でも貴重な文化財といえます。

この石臼は、地域交流センター（ＡＬＥＣ）の資料展示室で見学することができます。

水銀朱を精製した石臼
（長さ 24.6㎝）

●〒6430021 和歌山県有田郡有田川町下津野 2018-4
●有田川町役場企画調整課 TEL 0737 - 52 - 2111（代）
●E-mail b.kikakuzaisei@town.aridagawa.lg.jp
●ホームページ URL https://www.town.aridagawa.lg.jp